
双子のコンチェルト

雑次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子のコンチカルト

【NZコード】

N8346A

【作者名】

雛次

【あらすじ】

俺の家族は小学生の双子の妹たち。彼女たちは何か一人にしかわからぬ「共通」を持つているようだ。

前編（前書き）

初めまして 離次^{ヒナツケ}と申します。初めて投稿します、短くてすみません。
。。

俺には9才年下の妹たちがいる。

妹「たち」というのは双子だからだ。

見た目は小学校高学年、東アジア特有の漆黒の黒髪を背中に長く垂らしている。

それは美しいもので、本人もとても気に入っているように見える。顔はカワイイと言われているみたいだが、兄貴の俺から見ると「別段普通だろ」という感じだ。

しかし、この特徴は片方を説明したものではなく、二人に共通したものだ。

見た目だけではない、「中身」もだ。頭の出来も性格も口癖も好きなものもすべてが共通しているのだ。

見分けが付かない所ではない、他人から見れば全くの同一人物、まさしくそんな彼女たち。

双子だから似ているのは当たり前? そつだその通りだ。

双子だから似ているのは当たり前。

何度も、そう思つただろう。

しかし身近な人間は気づいてしまうのだ、それ以上の、何かに。

「お兄さん。」

双子の姉・アイ子に呼ばれて俺は顔を上げた。

「お兄さん。俺は彼女たちにそう呼ばれている。
実は」というと、もう少し気安く気軽に「お兄ちゃん」とでも呼んで
ほしいのだが、

もう長年この呼び方が定着してしまっているし、それにシスコン野
郎に思われても困るので

（今さらどうしようもないよな…）

俺は軽いため息を飲み込み返答する。

「そここの問題は+と-を入れ替えるんだよ、あとは「お兄さん。」

俺の説明のコトバを無視して次の妹が呼んだ。

双子の妹・イア子。誰がつけたのか、不思議な名前だ。

「彼女たちは人の話を聞こうとしない、容赦なく割り込んでくるの
にも慣れた。

苛立ちそんなものも無い、それに怒ったところで彼女たちには効果
など無いだろ?…。

「そこには%だから数字を直すために100をかけ・「お兄さん。」

…いつも通りの日常が進んでゆく。

今日は”算数”を教えてやっている。

教えてやっているとは言つても、わからない所を聞かれて解き方を簡単に教えてあげるだけなのだが。

休日はいつもこんな感じで過ごす、そんな俺は大学生だ。これは大学に入るずっと前から続いていることなので、今さら苦には思わない。

妹たちは頭の出来は中の下、これといって普通だ。

しかし、不思議なことがあった。

彼女たちは解けない問題が共通している。

アイ子が解けない問題はアイ子も解けない。アイ子が解けない問題はアイ子も解けない。だが、二人同時に解き方を聞くのではなく、必ず「どちらか」が聞いてくるのだ。

その聞いてきた問題が重なつたことは一度も無い。でも、「どちらか」が理解すると必ず「もう片方」も理解する。効率がよくて良いのだが、俺には不思議で仕方ない。

あと、次から次へと違う問題の解き方を聞かれるのは、小学生の”さんすう”としても脳みそがさらにねじれてしまいそうになる時もある。

「お兄さん。」

ぼーっとしていたためどちらが呼んだのか聞き取れなかつた。

本当に声もよく似ている、赤の他人だつたら絶対わからないだろう。

「あ、ごめん何？」

どちらかの動作で判断しようとする。

が、動かない。

「どうした？何かあつたのか？」

普段は問題を指差す動作をするはずなのに、微動だにしない一人。まるでそつ、大量生産された同じ顔のマネキンのようだ…

『お兄さん。』

二人が一緒に俺を呼んだ。

（俺が考えてたことがバレた！？）

一瞬焦る俺。なかなか失礼なことを考えたと後悔する。しかし、他人の心が読めるだなんてそんなことがあるはずはない。少し安堵しているところに一言田が放たれた、

『私達お兄さんの考へてることはわからないけど、アイ子（アイ子）のことはわかるよ。』

彼女たちの言葉に俺は困惑の表情をつくる。

（いきなり何を言い出すんだ？）

彼女たちはじつと俺のことを見ている。

「アイ子はね、アイ子の考へてることがわかるの。」

「アイ子もね、アイ子の考へてることがわかるの。」

「でもお前たちほどんぞー一人で会話しないじゃないか。」

（傷つけたかも）

自分で言つた後にはつと息をのむ。

二人は一人での会話をしない 僕はずっと一緒にいるけど、仲が悪いように見えたことは無い。

たまに彼女たちは見詰め合って笑っていたりする、一人ともおとなしい性格である。聞こえる大きさの声で話さないだけなのかもしない。

しかし会話をしていないのだ、小さい口から言葉は吐き出されない。

ずっと不思議に思っていた。

一卵性双生児だから外見がそっくりなことは普通でじゃないか、性格もとやかくいうことではないし

二人の関係も険悪じやなければそれでよい、と自分に言い聞かせた。

しかし、双子以上の何かがこの二人にはあるんじゃないかな?

そう思い始めたら、一人取り残された「兄」の僕は悲しかった。だから認めたくなかったんだ。

一人の「共有」というモノを。

しかし後日僕は「共有」を認めざるおえない状況に陥るのだ。その時の事を少し話そう。

前編（後書き）

読んでくださりありがとうございました。評価などいただけたら幸いです。

恥ずかしながら、後編も近々更新予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8346a/>

双子のコンチェルト

2010年12月10日21時44分発行